

専門家に いかに口を入れるか



西川伸一

Shin-ichi Nishikawa
profile

政治経済学部教授
専門は国家論

1961年 新潟県生まれ

1984年 明治大学政治経済学部
政治学科卒

1990年 明治大学大学院政治経済学
研究科政治学専攻博士後期課程退
学(4年間在学)、同年 明治大学政
治経済学部専任助手。その後、専任
講師、助教授を経て、2005年より
現職。2011年 博士(政治学)取得

【主な著書】

『裁判官幹部人事の研究』(五月書
房、2010年)

【主な所属学会】

日本政治学会、日本行政学会、日本
法社会学会

中学生のころ、国語の漢字テストで「専門」と書いたことがある。ほかにも同じま
ちがえをした生徒が多かったようで、先生
は「専門家には口を入れない」と覚え方のコ
ツを教えてくださいました。そういうえば、山崎
豊子の小説『白い巨塔』には、主人公の医師
が「医者同士が話をしている最中に、患者
は口をはさんではいけない」と患者をとが
めるシーンがある。

東日本大震災にともなう原発事故は、ま
さに専門家にいかに口をさしはさむかが問
われた。いうまでもなく、原発は気が遠く
なるほど専門的で精巧なメカニズムである。
ノンフィクション作家の広瀬隆は、「1基
ずつすべて異なる作りで、非常に複雑です
それがどうなっているか、東電も故障すれ
ばわからないのです」とさえ指摘する。

現場―東電本社―政府。情報は前者ほど
豊富にあり、決定権限は後者ほど大きい。
映画『踊る大捜査線』の名セリフ「事件は会

議室で起きてるんじゃない。現場で起きて
るんだ！」を引くまでもなく、本部はなか
なか現場を理解できない。専門家の口をつ
いて出る専門用語も見えない壁となる。

これについて、『もしドラ』ですっかりお
なじみになったドラッカーはこう述べてい
る。「専門家は専門用語を使いがちである。
専門用語なしには話せない。ところが、彼
らは理解してもらってこそ初めて有効な存
在になる。(中略)専門家が効果的であるた
めには、マネジャーの助けを必要とする。」

さて、3月12日の18時ごろ。首相官邸で
は、福島第一原発一号機への海水注入をめ
ぐって緊迫した議論が続けられていた。そ
の記録が5月10日に東電から公表された。

それによれば、このとき菅直人首相は班
目春樹・原子力安全委員長に「海水注入に
より(再)臨界の可能性はあるか」と尋ねた。

班目氏は「再臨界の危険性はある」と答えた
という。ところがその後、「再臨界の可能

性はゼロではない」と発言したと訂正され
た。5月23日の記者会見で、班目氏は「専
門家とそうでない人の受け取り方の違い」
が混乱を招いたと説明した。

同じ言葉を用いても、専門家と素人とで
はイメージする文脈が異なるということか
ならば、専門家が多用する専門用語はなお
のこと素人には理解できまい。そこで「マ
ネジャーの助け」が求められる。いいかえ
れば、高度に専門的な事態の解決には専門
家を集めるだけでなく、「マネジャー」的心
構えのある人材も欠かせないのでないか。
彼らが専門家の意図を「通訳」し、素人が決
断を下すのをサポートするのである。

あの日、菅首相は「マネジャー」に恵まれ
ず、自ら専門家に電話をかけたまじりかと伝
えられる。この悲劇を繰り返してはなるま
い。もちろん、二度目は喜劇でしかない。